

あしよろ・ハードサポート通信

12月、マイナス20℃を下回った地域もあり、とにかく寒いです。酪農場では皆さん嚴重な防寒スタイルです。成牛はルーメンがあるおかげで寒さに強くて、マイナス15℃くらいまでなら耐えると言われていますが、特に哺乳子牛は、わたしたち以上に寒さに弱く、冬は簡単に体調を崩しやすい時期です。今月も子牛の話題を続けます。

◆ ミルクの量はどのくらい？



写真：バケツは哺乳量を増やしやす

若齢子牛の栄養源はミルクです。子牛にミルクをしっかり飲ませると、おもしろいほどぐんぐん成長していきます。

昔は、哺乳量は1日2回、2リットルずつ、合計4リットル、というのが合言葉のようになっていましたが、子牛を上手に育てる酪農家さんにお話を聞くと、1日8リットル以上とか、飲みただけ飲ませている、という方が多いです。



哺乳量を増やすと下痢する、という不安の声もありますが、乳用子牛を親付けすると、毎日10リットル以上のお乳を飲んでいることがわかっています。哺乳量が多いこと自体が下痢の引き金になっているとは考えにくいようです。実際にミルクをたくさん飲ませている酪農家さんたちは、生後1週齢前後で、軽い軟便・下痢があってもその後は問題なく育っていく、とおっしゃいます。

写真：2リ、3リットの哺乳びんを使い分け

◆ 哺乳にまつわるチェックポイント【全乳哺育の場合】

全乳哺育では、その乳がきれいかどうか大きなポイントです。バルククーラーから抜いた全乳は概ね問題ないですが、バケツミルクや全乳を移すバケツ、温める容器はいつも衛生的でしょうか？搾った乳を長時間常温で置きっぱなしにしていませんか？常温保管は、場合によっては激しく雑菌繁殖するので、必ず冷蔵しましょう。

また、分娩後の出荷待ち乳や休薬期間乳などの廃棄乳の合乳は、特に乳脂肪を中心に乳成分がバラつきやすい傾向にあり、食餌性の下痢の原因になることもあります。

表) 経産牛300頭規模酪農農場で発生した廃棄乳成分の推移

	11/7	11/8	11/10	11/11	11/12	11/13	11/14	11/15	11/16	11/17
乳脂肪%	4.3	4.7	4.6	4.3	4.8	5.1	4.7	4.6	4.8	5.0
乳蛋白%	3.4	3.3	3.6	3.4	3.6	3.7	3.5	3.6	3.9	3.8
乳糖%	4.3	4.3	4.3	4.3	4.2	4.3	4.3	4.2	4.1	4.2

◆ 哺乳にまつわるチェックポイント【代用乳哺育の場合】



子牛の栄養になるのは「代用乳（粉ミルク）」部分で、何gの粉ミルクを何リットルのお湯に溶かすかがポイントです。カップ〇杯、で管理せず、必ず「量る」習慣をつけます。

一般的な代用乳には粉ミルク1日500g 給与の商品が未だに多いですが、銘柄によっては粉ミルク1日1,000~1,200g 給与するものもあります。わたし自身は、1日500gの粉ミルク量だけだと、十分な発育が見込めないと感じています。まずは800g 給与を目指して増給し、子牛の成長をを感じていただけたらと思います。

ただし、比較的安価で植物性原料が多い代用乳では、増給すると下痢を起こしやすい銘柄もあるため、紙袋にある原料名は事前に確認しておきましょう。



粉ミルクは、銘柄によって5~7倍量の希釈が推奨されています。薄すぎても濃すぎても下痢の原因になります。

今時期はミルクが簡単に冷えるので、熱めのお湯で溶かすと時間稼ぎできますが、熱湯は厳禁です。湯温が高すぎると、粉ミルクの脂肪を壊したり、タンパク質を変性させたりするので、50~60℃程度を上限とします。

写真：お湯の上に粉ミルクをかぶせ、泡立て器を使って混ぜるときれいに溶けやすくなります。 (久富聡子) ☆来月も子牛の話が続けます

-
- ・ 来年1月下旬には、MP アグロ社の協力で安井喬氏（ケミン社）を講師に、周産期の栄養についての勉強会を開催します。
- ・ 延び延びになっている営農部佐藤さんによる搾乳勉強会は、2月に開催予定です。何度も、「いつになったの？」というお声をいただきました。大変失礼しました。
- ・ 12月に札幌で酪農女性サミット2017が開催され、足寄からも3人の酪農女性が参加してくださいました。哺乳や搾乳などの実務に関わる女性が出かけて勉強し、刺激を受けて帰ってくると、牧場にとって大きなプラスの成果につながっていくと思います。まずは近場から。地域の勉強会には、女性も遠慮せず、どんどんご参加ください。